

勤勉精神の奪還が 日本を幸福にする

東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男

増加する延命期間と医療費用

帝政ロシア時代の作家レフ・トルストイは『アンナ・カレーニナ』の冒頭で、幸福な家庭はいずれも類似している」と記載している。その幸福の要因の調査結果によると、日本では男女とも第一は健康である。その健康の指標である平均寿命について、昨年の統計で日本は女性が八六・八三歳で世界一位、男性は八〇・

五〇歳で三位、男女合計でも一位になっている。男性の三位も首位の香港とは〇・七歳という僅差であり、問題とするほどではない。

さらに今年八月、アメリカの大学を中心とする研究団体が世界各国の健康寿命の調査結果を発表したが、日本は女性が七五・五六歳、男性が七一・一一歳で男女とも一位である。健康寿命は二〇〇〇年に世界保健機関（WHO）が発表した概念で、「日



常生活で支援や介護を必要とせず自立して生活できる期間」と定義されている。しかし、平均寿命と健康寿命が男女とも世界一位であることは一見幸福そうであるが、問題がある。

平均寿命から健康寿命を引算した数値は延命期間と名付けられる。医療や介護などの支援により生存して

いるという意味で、本人にとつては憂鬱であるし、周囲にとつても手間や費用のかかる期間であり、短期であるほど幸福と理解できる。日本では二〇一〇年に女性で五・二年、男性で三・七年であるが、二〇年前は、一・三年と〇・九年であったから、急速に増加している。これは医療や介護の進歩でもあるが、厄介な問題を発生させている。

最近、昨年の日本の総医療費が四〇兆円という発表があった。一九九〇年には二兆円であったから二五年間間で倍増している。これに寄与しているのが高齢人口の増加であり、過去一年で医療費用は一・八%増加したが、三分の二近くは高齢人口の増加が影響した数字である。現在、六五歳以上人口は三三九五万人で全体の二七%であるが、三〇年後には三八五六万人で三八%と推計されているから、今後は一層厄介な問題になる。

勤勉が医療問題を解決する

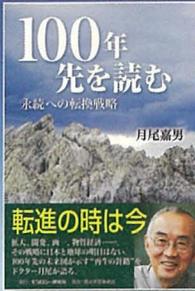
この問題の解決に示唆をもたらす実例がある。徳島県上勝町は高齢女性を中心となつて料亭などに木の葉を販売する商売で成功して有名になっている。一人当たり数百万円にもなる売上げばかりが注目されるが、より注目すべきは高齢化率五一%という過疎の高齢社会で、一人当たり医療費用が年々減少していることである。二〇一〇年ごろには八〇万円以上であったが、最近では六〇万円前後に低下し、徳島県内で最小の地域になっている。

木の葉の採集のために早朝から山道を上下して身体が健康になつていくという理由もあるが、明確な理由は仕事に熱中して病院などで時間を浪費してはられないということである。この商売を起業した横石知二社長による「年金から年収へ」という名言がある。自分で収入を獲得しているということが家族や社会での役割を確保しているという精神の健康になり、それが肉体的健康にも反

映していると推測できる。

実際、この関係は統計にも反映しており、都道府県単位で高齢者有業率と一人当たり高齢者医療費を対比させると、前者が三六%で一位の長野は後者が低額の順番で三位、前者が三四%で三位の静岡は後者が四位である一方、一人当たり高齢者医療費が最大の福岡は高齢者有業率で下位から七番、高額の順番で六位の秋田の高齢者有業率は下位から四位という状態である。高齢者層が就業しているほど、医療費用は少額という関係が明瞭である。

何歳まで仕事をしたいかという調査によると、一位は可能なかぎり三七%、二位は七〇歳までで二三%である。日本の年間労働時間は四〇年前の二二〇〇時間から最近では一七三五時間と欧米諸国と対等になってきたが、労働を美德とする日本では高齢でも仕事をして社会に役立ちたいというのが本心である。高齢者層が活躍して医療財政問題も解決するという模範を世界に提示することが高齢先進国家日本の役割である。



絶賛発売中!!
ご注文は添付のハガキで